

## \* 子ども防災博士意見発表の部 \*

### 最優秀賞 「災害の後は、常に災害の前」

上岩出小学校 永家 伶さん



ある日の、私と母の会話です。

「父ちゃんが？ それ、ほんまなん？」

私はにわかに信じることはできず、思わず聞き返ししまいました。

「ほんまやで。伶が赤ちゃんの時、夜寝ていたら地震がきて、父ちゃんが伶たちにふとんをかけてくれたんやで。なにか物が落ちてくるような揺れではなかったけどね。」

私の父は、仕事で疲れているということもあるのですが、一度眠ってしまうと、なかなか起きません。母が

「お風呂は入りよ！」

と言っても

「うーん…。」

と言って、またすぐにごろんと寝てしまいます。そうした姿をいつも見ていた私は、私たちの命を救うため、自分の危険を顧みず行動してくれた父に対して

「そうなんだ…。」

と心が温かくなるのを感じました。

私がこんな会話を母としたのには、ある理由があります。そして、そのきっかけとなった出来事というのが今年六月十八日に起こったあの「大阪府北部地震」なのです。

その日私は、いつものように登校し、いつものように教室へ行き、いつものように友だちと話していました。時刻は、もうすぐ八時ちょうどという午前七時五十八分でした。

「あれ？」

何か細かい揺れが続いたかと思うと、それは次第に大きくなっていきました。考えが追いつかず友だちと顔を見合わせた数秒後、

「地震や！」

という誰かの言葉で初めて行動を起こすことができました。すぐに机の下にもぐろうとしましたが、周りの友だちも同じようにそこへ入ってきました。全員が体全体を入れることはできないと思った私は、とにかく頭だけは守ろうと頭部を机に入れ、揺れが収まるのをじっと待ちました。しばらくして先生が、

「みんな、大丈夫か！」

と教室に入ってきた時には、私も友達も無事を確認し合い、ほっと胸をなでおろしていました。

本当に偶然なのですが、私たちは、そのつい先日まで「防災」についての学習を学校で行っていました。日本で起こる災害や避難の方法、その準備や心構えなど、学校で出し合ったり、また自身でも色々調べたりしていました。

「自分の命は自分で守る。」そのことの大切さを、これまで以上に「確認」できたと思っていた私。けれども、いざ自分の身に災害が降りかかったこの時まで、私は、とっさに行動することの難しさを本当の意味で「理解」していなかったことに気付いたのです。

みなさんは、「災間」という言葉を知っていますか。ひとつの災害が起こってから、次に予想される災害との間の時期のことです。

「災害の後は、常に災害の前。」私たちが生きている現在は、まさにそのような期間なのではないでしょうか。大地震や津波、大雨による洪水や土砂崩れ、突然の火山噴火……。避けようのない様々な災害に対して、私たちは常に「それは起こりうるもの」として備えなければなりません。安全や物資の備えはもちろんですが、それ以上に「意識の備え」が必要になってくるでしょう。しかし残念なことに人は、時が経つほどに災害への意識が低くなると言われていきます。事実、先日の地震の日も収まってからすぐに何事もなかったかのように遊んでいる人達が学級の中にいました。「もしも」という意識は、自分たちが考える以上に難しいものなのでしょう。ですが、それでも考え続け、それでもみんなを確認し続けなければならないと思います。「今」「この場で」大きな災害が起きた時、また、起こりそうな時、自分はどう行動するのか。どう行動するべきなのか。その考えと意識一つひとつが、大切な命を守ることにつながるのですから。たとえ、はっきりとした答えが出なくとも、そうして一歩ずつ一歩ずつ進んでいくということが、「今できる」最善の方法ではないでしょうか。

今回、私は自身の体験と家族との会話を通して、二つのことに思いをめぐらせることができました。一つは、先に述べた「自分の命を自分で守ることの難しさ。」そして、もう一つは、家族から伝えられた「誰かに助けられたことで今の自分がいるのかもしれない」という気持ちです。とっさの瞬間に、自分以外の人を思いやるという意識を、私もどこかで持ちたいと思いました。小さなことかもしれないけど、これが私の一歩なのでしょう。

普段恥ずかしくてなかなか言えないけれども、助けてくれた父に

「ありがとう。」

という感謝の気持ちを持ちつつ、私はこの大切な命を守り、生きていきたいと  
思います。